東京新聞朝刊　2016年11月17日付　　[市民]欄

※転載許諾済み

shimin-hatsu@tokyo-np.co.jp

トモニ　カンガエル　ツナガル

野菜作りで社会性

トモニ　わーくはびねす農園親の会　上谷佳弘さん(55)

農園経営のエスプールプラス＝03(6859)6555

かみたに・よしひろ　1961年、島根県生まれ。地元の高校卒業後、仙台大学を出て体育教師として私立三育学院の中学、高校に勤めた。米国カリフォルニアの同学院関係学校で勤務の後、現在は千葉県市原市で小学校教師。長女と次女は独立し、市内で夫婦と周人(しゅうと)さんの3人暮らし。

わーくはびねす農園市原ファームで働く人たち＝千葉県市原市で

知的障がい者が就労する機会は極めて少なく、また仕事も限られているうえ離職率も高いという。「わーくはびねす農園に就職した親の会『えがお』」(東京都千代田区)を立ち上げた一人の上谷佳弘さん(五五)は、知的障がい者が最低賃金を保証されて働くことに理解を求めるとともに「親仲間の不安を共有し、互いがサポートし合えれば」と言う。(小寺勝美)

長男の周人はウィリアムズ症候群という知的障がいです。別名エンゼルスシンドロームといって閉じこもるタイプではなく、社交的で人を疑うことがなく、誰とでもすぐ仲良くなるのです。生後間もなく担当医師から障がいがあると知らされた私たち夫婦は、いろいろ病院を回ったり、言語リハビリなどを試したり…自分の子どもに障がいがあることは簡単には受け入れられませんでした。結局、二~三年かかりました。

周人は茨城県の特別支援学校を卒業後、パンや菓子を作る会社に就職の話があったのですが「自力で通勤してほしい」と言われたのです。そうすると自転車しかなく、危ないのでやめました。わーくはびねす農園の話はたまたま聞きましたが、あまりの条件の良さに簡単に信じることができませんでした。農園は千葉県市原と千葉、茂原三市内の五カ所で、百社に雇用された知的障がい者ら約四百五十人が、各社がそれぞれ一区画ずつ持っている農地で、最低賃金が保証された上で働くというのです。

多くの知的障がい者が小遣い程度のお金しか稼げない中「最低賃金を保証するなんて本当か」「酷使されるのではないのか」といった心配もありました。詳しく聞いたうえで、一年ほど農作業の訓練や通勤の仕方、職場での共同生活など日常生活の訓練を受け、晴れて一社を紹介され面接試験に合格しました。

市原市の農園のハウス内で野菜を作るのが周人の仕事です。午前七時から午後二時までの勤務で、自宅から駅まで車で送り、後は一人で内房線の五井駅へ行って、農園の送迎バスに乗るというコース。今では仕事終わりに五井のゲームセンターで遊んだり、ゲームソフトやAKB48のCDを借りたり買ったりして楽しんでいます。自分の居どころができ、生活の行動範囲が広がり、社会性が生まれたことが大きいと思います。

障がいのある子を持つ親はみんな「私たちが死んだら…」という不安をいつも抱えていて、私たち自身二十数年たった今も不安です。障がいは人それぞれで軽重もあり、家から出て行かせるだけでも一大決心をする方も。親の会は、まずお互い知り合って、いろいろな話ができる関係づくりを一番に考えています。不安を家庭だけで抱えず、お祭りやピクニックなど定期的に集まって励まし合い、支え合いたいと思います。

障がいのある方の事件が報道されるたびに、障がい者に対する偏見を持たれるのではないかと不安になります。今、「障害」を「障がい」と書き換えるようになりましたし、多くのサービスを受けられますが、何か小手先の変更のように思います。健常者、障がい者という表現をする社会ではなく、一人一人が一つの個性を持った大切な存在であるという心を培っていける社会を望みますし、そんな時代になればいいですね。